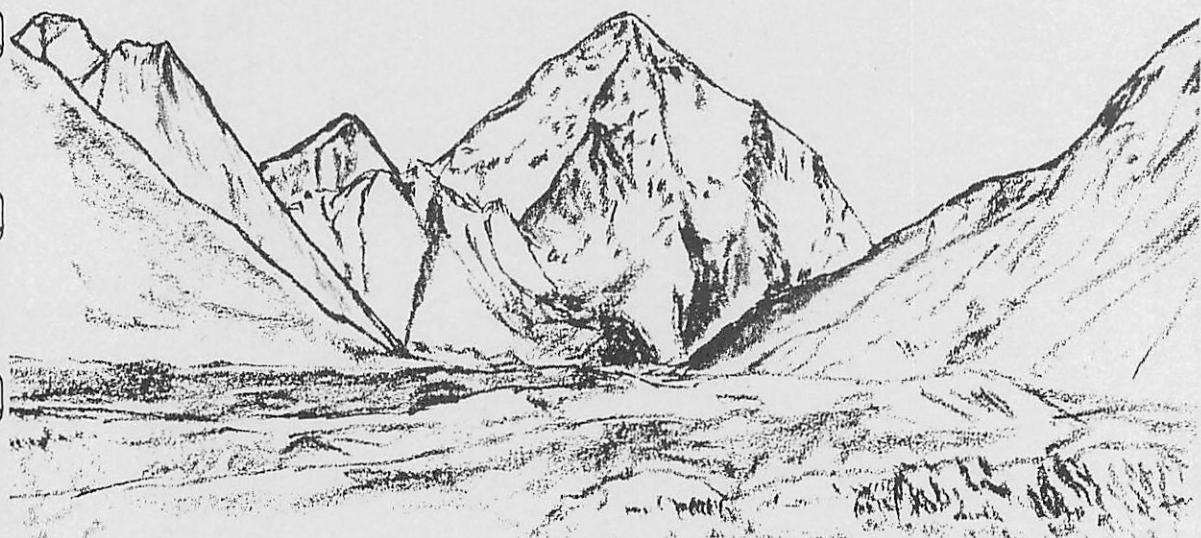


北関東の山無し県 茨城のクライマー集団の会報

R&V 24号

1997年 1月～3月



ACC-J茨城

目指せヒマラヤ!!

Rock and Valley 97' 冬 No 24



谷川岳幽ノ沢左方ルンゼ核心部の登攀 97' 3'
《photo by K. motozu》

雪、岩、沢に青春をかけた若人の記録集
アルパイン・クライミング・クラブ・オブ・ジャパン・茨城

山に地形図は持つてい かなくても良い？

私は地形図を見るのが好きだ。見ていると時間の経つのを忘れる。必ずしもこれから行く予定の所とは限らない。地図箱から任意の地形図を取り出し、沢の屈曲度、センターの密度、毛虫記号などから、地形図に記載のない滝やゴルジュや未踏の岩壁を想像するのである。その後その沢の名は何という沢か文献で調べ、遡行図を捜し出す。そしてその沢の内容が自分の想像したものと合っている時とそうでない時がある。その当たり外れがまたなんとも楽しい。もし遡行図がなかったり、記録がなかったら自分で行って確認したくなるのである。

先日、水戸葵のM氏が突然我家に立ち寄った。つくば市に用事があり、ついでに国土地理院で地形図を20枚程買ってきたと言っていた。どうやら彼も私と同じ趣味があるらしい。地形図を買った目的は渓流釣りのようであった。彼もギンギン

のアルバインクライマーから少しづつ変化しつつあるようだ。以前の2人の話は、アルバインクライミングの話一辺倒だったが、最近は沢と渓流釣りの話が半分以上を占める。フムフム、少なからずも俺の影響を受けたにちがいないな。それでいいのだよMさん、お互い若くはないのだから。地形図の話から只見のゴルジュの沢の話になり、こんどその沢に釣りに行こうという話にまで発展してしまう。見たこともない沢に行きたくなるのは、地形図に、ここにはイワナがいるからおいで、と書いてあるように見えるからである。予想が的中したらもうたまらない。ギャンブルで大穴が当たった人と同じ心境ではなかろうか。そんな約束をしてM氏は帰っていった。

会員諸君は山に行くとき地形図を持参していますか。私が見る限り、持参していない人が多いように思える。山に行くとき地形図を持って行くのは基本中の基本である。持参している人でも、装備表には必ず地形図が入っているので持っていくだけ、というのでは困る。登山技術書にも、山には必ず地形図は持つていかなければいけない、みたいなことが書いてある。それには地形図を読め

ることが前提になっている。

たしかに我々登山者と地形図は、切っても切れない仲である。私なんぞは、地形図がなければとても不安で山に登れない。持参する地形図は、当然国土地理院の2万5千図である。というのは建前である。我々田舎在住者にとって、以前は国土地理院の地形図を手に入れるのは大変なことであった。今はつくば市に国土地理院があるので、手に入りやすくなった。とは言っても、平日の昼間につくば市までなかなか買いに行けないのが実状である。本音で言わせてもらう。私個人の意見だが、絶対地形図が必要な山行と、必ずしも持つていかなくても良い山行があると思う。急に決まった山行でも、沢登りとか冬山の場合は無理しても地形図はそろえる。絶対に必要だからである。しかし皆さん、今までに夏の滝谷やチンネや北岳バットレスの登攀で、地形図が必要になったことがありますか。夏の谷川東面の登攀で地形図を必要としたことがありましたか。少なくとも私は一度もないし、これからもいらないと思う。衝立を登って北稜を降りたり、鳥帽子奥壁登って南稜を降りるとき、たとえ下降ルートが分からなくなって、

地形図でルートを見つけだせますか。見つけだせないでしょう。こういう時役に立つのは概念図かルート図であろう。私はこういう山行に地形図はいらないと思う。どうしても持つて行きたいのなら、一般道を下降する時のために、書店で簡単に買えるエアリアマップで十分だと思う。メジャー山群の夏山縦走やハイキングは、エアリアマップで十分で、苦労して国土地理院に行かなくても良い。

指導者が初心者に教えるのに、地形図は時と場合によっては持つていかなくても良い、と教えるわけにはいかないだろう。だから持つていきなさいと教える。国土地理院の地形図を買うのは、前述したとおり田舎では大変なことを知っているので、私はチケイズチケイズとあまりうるさく言わないようにしている。各自、必ず地形図が必要かどうかよく山行を見極め、用意していただきたい。少なくとも、沢登りや藪山や冬山は絶対必要ですぞ。磁石も添えてね。高度計もあると尚更けっこうですね。

(本図一統)

《目次》

1997年 冬号 1月～3月 ACC-J 茨城

巻頭言	• • •	1
集会報告	• • •	3
山行報告	• • •	4
冬合宿 前穂高北尾根	• • •	5
1997年八ヶ岳・冬合宿(パート2)	• • •	8
松木沢アイスクリミング	• • •	11
阿弥陀岳北稜・赤岳主稜	• • •	12
八ヶ岳・文三郎道～赤岳	• • •	12
妙義山	• • •	13
会津磐梯山(山スキー)	• • •	13
谷川岳幽ノ沢左方ルンゼ	• • •	15
戸隠・P3稜	• • •	18
会津駒ヶ岳～大戸沢岳北東稜(山スキー)	• • •	20
谷川岳(天神尾根)	• • •	21
谷川岳(一ノ倉尾根)	• • •	22
ACC-J 茨城会則(改訂版)	• • •	23
友好団体の月報・会報・その他	• • •	31
編集後記	• • •	33

表紙絵…コンコルディアから望む K2

b, c, I., Mami

集会報告

(於、スカイラークガーデン)

【 1月 】

1月 8日

出席者 本団、木村、古山、菊池、新美、告、紺野、坂本(勘)、鯉河、笹平

1月 22日

出席者 本団、澤田、古山、高木、新美、坂本(勘)、笹平、紺野、中島、告、木村

【 2月 】

2月 5日

出席者 本団、古山、新美、高木、木村、菊池、告、坂本(勘)

2月 19日

出席者 本団、紺野、古山、新美、菊池、木村、告、坂本(勘)、澤田、笹平

2月 26日 《リーダー会》

出席者 鯉河、古山、木村、本団、菊池、告、笹平

【 3月 】

3月 5日

出席者 木村、古山、本団、新美、紺野、菊池、告、坂本(勘)、笹平、澤田

3月 18日

出席者 本団、菊池、新美、紺野、古山、告

山行報告

《 1997年 1月～ 3月 》

【 1月 】

12月28日～1月 4日	冬合宿・前穂北尾根	し古山、告、紺野、笛平、坂本(蔵)、新美 本団、澤田
12月28日～1月 1日	冬合宿・八ヶ岳	し木村、他 4名
1月 19日	《会山行》松木沢・7イスクライミング	し本団、笛平、鯉河、紺野、澤田、坂本(蔵)
1月 15日	奥多摩・川苔山	坂本(蔵)
1月25～26日	八ヶ岳・赤岳主稜	し本団、笛平、坂本(蔵)、高橋
1月 26日	八ヶ岳	し古山、紺野

【 2月 】

2月 1～2日	岳連冬山講習会・あだたら山	し新美、坂本(蔵)
2月 9日	岩トレ・御岩山	し澤田、坂本(蔵)
2月 23日	妙義山	し告、新美、紺野、笛平、坂本(蔵)

【 3月 】

3月 2日	岳連救急法講習会	し告、澤田、笛平
3月 2日	磐梯山・山スキー	し本団、古山、坂本(蔵)
3月 16日	戸隠・P3稜（中退）	し古山、本団、告
3月 20日	谷川岳・幽ノ沢左方ルンゼ	し本団、古山
3月 23日	戸隠・P3稜	し本団、告
3月 23日	会津駒ヶ岳・山スキー	古山
3月29～30日	《会山行》谷川岳・一の倉尾根 谷川岳・天神尾根	し告、紺野、古山、澤田 し菊池、坂本(蔵)

冬合宿 前穂高 北尾根

1996. 12. 29～1997. 1. 4

パーティ L古山正文、笹平孝、紺野哲雄、告広道

今回の合宿では、極地法を実践するためルート工
作、荷上げなどの編成を組んだが、天気が1日まで
しかもたないようなので八峰にいる者でパーティを
組み直し、アタックすることにした。

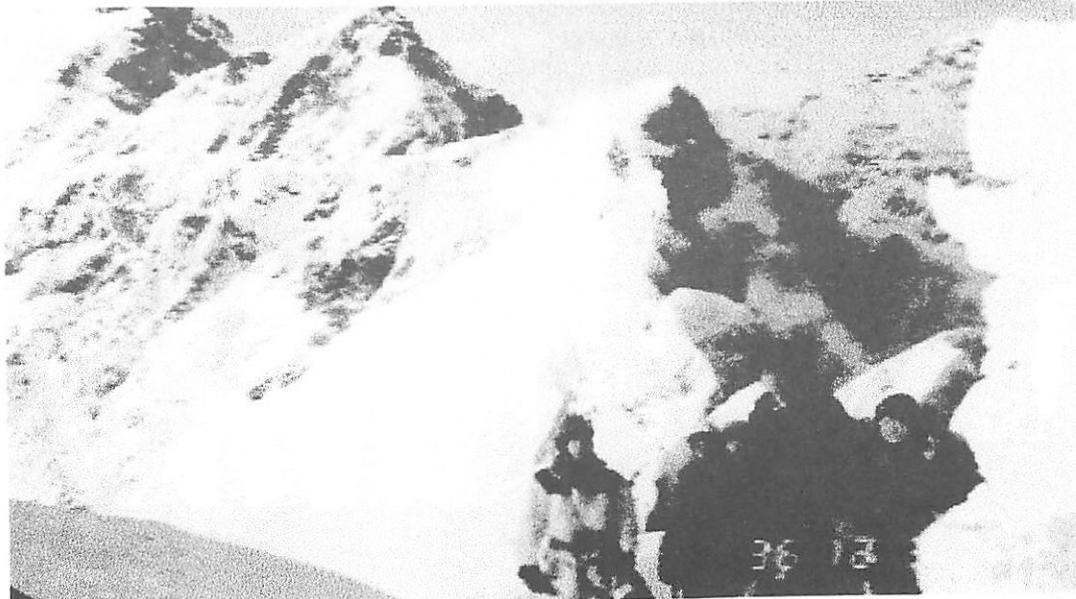
未明に着いたことや、今日は徳沢までということ
もあり、ゆっくり車を出る。徳沢園で缶コーヒーが
飲めたのがうれしかった。

翌日、八峰に向かって慶應尾根をつめていくが、
荷が重いこともありフラフラになりながらやっと八
峰頂上。先に2パーティがテントを張っていた。テ
ントを張るため整地を始めたが、今年は雪が少ない
ようで、すぐにブッシュにあたってしまい、テント
を張るだけのスペースを作るのに苦労してしまった。

翌日、今日の目的地3. 4のコルを目指して登り
出しが、ザイルを使う六峰から渋滞してしており、
かなりの時間待たされる。まあしかし天気はいいし
今日は3. 4のコルまでということもあり、のんび
り過ごす。コルにはテントが1張りあった。テント
跡がほかに2ヶ所だったので少し手を加えてそこに
張った。テントの空気穴から三峰の登りがよく見える
が、もうそろそろ暗くなるというのにまだ登っている
パーティがいる。風もありけっこう寒いのにガ
ンバルものだと思った。

翌日、テントをそのままにして出発。9：15分に
頂上。ほぼ同時に着いたパーティと写真をとりっこする。
今日は八峰まで戻るつもりなので早々と下ること
にする。下りでも先行パーティがいたので懸垂のたび
に待たされる。風があるので寒い。テントを撤収し下
っていくが、五峰の下りで私が最中雪を踏み抜きバラン
スを崩して倒れてしまった。『ヤバイ。』と思いつ
っさにピッケルを前に刺したが、そのピッケルで顔を
打ってしまい鼻から口にかけて感覚が無くなってしまう。
まあ雪が血で赤くなってしまったので血は出てる
けど止まってよかったと思いきや、今度は前のめりで
少しづつ奥又白側へ滑りはじめた。まあ普通だったら
こういう場合『もう、自分の人生は終わりだ。』なんて
考える暇も無くことは終わってしまうのだろうがこの
時はハッキリ考えた。しかし運が良かったのか雪の
ワレメに腕が入り止まることができた。口の感覚がなく
歯が無くなかったと思ったが見てもらったらみんなつ
いていたので本当によかったです。

八峰に着くと、後発だった本団氏たちも到着してお
り、すばらしいテント場を作ってくれた。翌日、
本団氏たちがアタックする予定だったがその夜から雪
が降り始めた。交代で雪かきをするがかいともかいても
積もってしまいイヤになる。



北尾根・B Cにて

1月2日、雪のため停滯。笹平君が持ってきた小型ゲームが活躍した。

1月3日、吹雪いていたが下ることにする。先行で1パーティ下っていったが引き返してきた。吹雪きの為、下るルートがわからないという。後からついていくので先に降りてくれというので下り始めるが、たしかにルートがわからない。赤布を立てながら慎重に下っていくが途中でいきずまってしまった。本岡氏が新雪を掘り起こしトレールを見つけてルートの判別がなんとかできた。こういう方法もあるのかと勉強になった。徳沢園にてテントを張る。私はあまり酒が飲めないが、みんなはよく飲み外ではいるやつもいた。

翌日風が強い中を下り、途中温泉に入って帰った。

1月 29日	逆巻温泉(8:45) - 徳沢園(14:50)
30日	徳沢園(6:45) - 八峰(14:15)
31日	八峰(7:15) - 六峰(10:20) - 五峰(11:05) - 3, 4のコル(13:40)
1月 1日	3, 4のコル(6:45) - 前穂頂上(9:15) - 3, 4のコル(11:10) - 八峰(15:40)
1月 2日	停滯
1月 3日	八峰(10:30) - 徳沢園(14:50)
1月 4日	徳沢園(9:30) - 逆巻温泉(13:40)

(告記)



北尾根・3, 4のコルにて



北尾根・3峰の登攀

1997年 八ヶ岳・冬合宿（パート2）

1996.12.29~1997.1.1

パーティ L名雪博二、木村一、他3名

『ザイル残り5メーター！』石尊稜での1シーンが今でも目に浮かんできます。

事の発端は11月30日に筑波山で開催された『ナーゲル祭』の晩、アルコールが入った勢いでACC-J（東京）の冬山合宿に参加する事になりました。

冬山に登るのは18年間のブランクがあり、自分の体力がどの位あるのか、冬山の厳しい寒気に耐えられるのか不安だったが、合宿の食事の豪華さに釣られての参加となってしまいました。しかし、現在主流のプラスチックブーツを持っていないので、革製登山靴の手入れ、アイゼン&ピッケルの錆落とし、更にどこに収納したか判らない登山用衣類の準備等、事前の準備が大変だった。1つつの装備を手入れしながら18年前にタイムスリップしていく自分を感じていました。

12/29未明、八ヶ岳山麓の小松山荘まで車で入り仮眠後、想いで深い登山道を赤岳鉱泉に向けて出発した。赤岳鉱泉までは約2時間の行程であり、ダブルボッカでベースキャンプを設営した。

翌12/30は、阿弥陀岳の大北稜と赤岳の南峰リッジを登攀する予定でベースキ



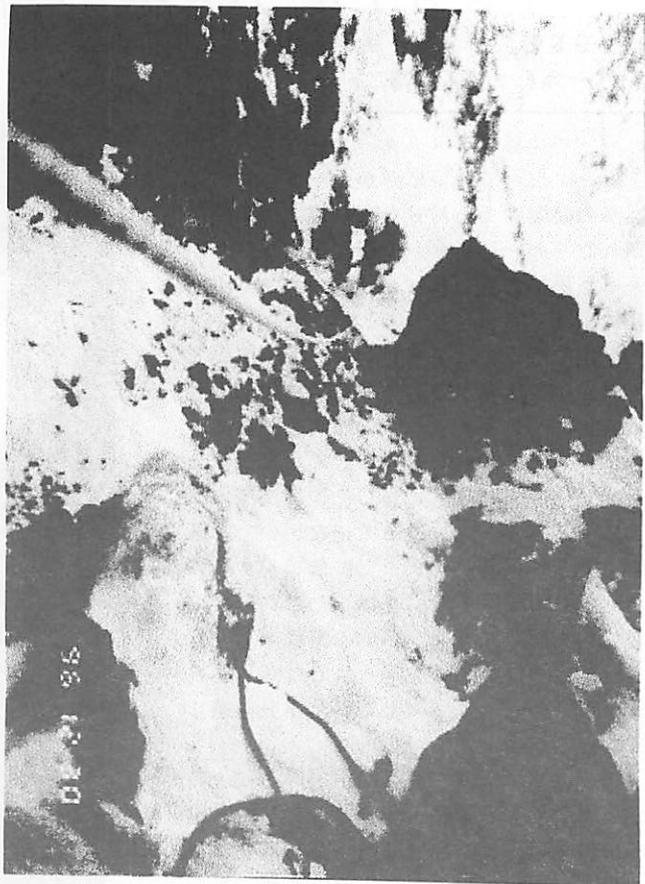
阿弥陀岳北稜

ャンプを6:30に出発。阿弥陀岳大北稜には女の子が入っている先行パーティがあり、下部の樹林帯からザイルを使用して黄色い声を上げていたので、その脇を追い越させて貰い、上部岩稜帶の下でアンザイレンして1ビッチ約25mで岩稜を抜け、更に上部の雪稜をコンテで登り、阿弥陀岳の頂上に到着。頂上で記念写真を撮り小休止後、中岳に向けて下降を開始したが登ってくる人が多く、下降に時間を要してしまった。中岳を越える頃から風が強くなったりヤッケを被り、文三郎道を横切り、更に急な雪面をトラバースして南降りリッジに向かった。南峰リッジの取り付きはもっと下方だが下るのも億劫なので、適当な所でアンザイレンして岩と氷のミックスした所を3ビッチ登り、南峰リッジの正規ルートに入った。更に岩稜帯を2ビッチ攀り赤岳南峰の肩に出た。

頂上でザイルを巻き小休止、赤岳頂上は風も弱く大快晴。時計を見るとまだ12:30。時間も早いので予定を変更して硫黄岳までの縦走を試みる事にした。途中で嫌になったら地蔵尾根、又は大同心稜を下降すればいいやとの気楽な気持ちでスタートしたが、日ノ岳への登りで後悔が始まってしまった。

『赤岳～横岳の縦走はこんなに悪かった？』ハシゴ場＆鎖場が続き多少緊張感のあるうちはまだしも、急な雪面の登りになると後悔の連続。途中硫黄岳の石室でビールを飲み大休止。バテバテになりながら硫黄岳に到着15:00。今朝登った阿弥陀岳が遙か彼方に見える。『あそこからここまで良く来たもんだ！』と自分の体力に多少自信が出てきた。名雪大先生と握手して下山。夜はマグロのサシミと蛸のサシミで宴会。

12/31。昨日の大縦走の疲れが残っているのでテント発7:30。今日の予定は石尊稜の登攀である。石尊稜の取付着8:30。取り付きは先行パーティが11人もいたので名雪先生は昨日に続きキジ打ちに行ってしまった。痔の手術をしてからは野〇〇が快適に出来るとの事?。恥ずかしがり屋の私には、お天道様の下で汚いお尻を出す事など到底出来ない事である。しかし、いつになら石尊稜に取り付く事が出来るのか、先行パーティはトップ1人に後続6人の大パーティ。とうとう名雪大先生が痺れを切らし、先行パーティのザイルを跨いで登り始めた。石尊稜取付の1ピッチは以前に攀じた時の2ピッチ目らしいが、先行パーティが難しそうに攀じているので多少不安になったが、名雪大先生は途中草付きにハーケンを1本打ち、軽やかに攀じてしまった。50mザイルが延びOKコードがきたので攀じ始めたが、アイスバイルが草付きに良く効き快適な登攀で先行パーティを追い越し、更に名雪大先生の脇をスリ抜けでそのまま急なブッシュ帯の雪面を攀じ、稜上にてて確保。ここからは昨日縦走中に稜線からもハッキリ見えた雪稜の登



赤岳南峰リッジ

テント帰着(16:00)

12/31 テント発(7:30) - 石尊稜取付(8:50) -
登攀開始(10:40) - 登攀終了(12:15) -
地蔵尾根(13:00) - テント帰着(14:30)
1/1 下山開始(9:00) - 美濃戸口(10:40) -
帰宅(17:50)

(木村 記)

攀だが、トレースもバッチリなのでザイルを巻き、途中写真を撮りながらコンテで登り、上部岩壁の下に到着。上部岩壁には先行パーティが取付いたばかりなので、エスケーブルートで稜線に出て登攀終了12:15。ガッチャリ握手後ビールで乾杯。下降は地蔵尾根を途中から尻セードで快適に下り40分で行者小屋到着。ベースキャンプには後発隊の水島永世名誉会長、松原登攀隊長、吉田撮影隊長の3名が入山していた。夕方から日本橋老舗の特上肉のシャブシャブで大宴会。

1/1。明日から所用があるので私一人で下山。
帰路車窓から見る八ヶ岳が美しく見えた。

12/29 小松山荘(9:00) - 赤岳鉱泉(10:40) -
小松山荘(13:00) - 赤岳鉱泉(14:50)
() 内はダブルボッカ時のタイム

12/30 テント発(6:30) - 阿弥陀岳北稜(8:40)
- 阿弥陀岳頂上(9:20) - 南峰リッジ取
付(10:50) - 赤岳頂上(12:10) - 横岳頂
上(13:50) - 硫黄岳頂上(15:00) -



赤岳南峰リッジ

松木沢アイスクライミング

1997. 1. 19

パーティ L 本図一統、澤田仁、笹平孝、紺野哲雄、坂本恵美子、鯉河仁志

正月合宿も終わり、寒さも厳しくなってくると、何処の山岳会でもアイスクライミングの練習山行を予定するのが定番のようである。当会も御他聞にもれず足尾松木沢でのアイスクライミングを会山行として1月19日に行なう事となった。私も会山行ぐらいは参加しないとOB会員にされそうなので参加した。

18日の夜に下館9時集合。私は途中で澤田を拾い下館へ向かう。集合場所には、本図さん他4名が来ており、誰が参加するのか分からぬが本図さんによると参加者はこれだけのようだ。本図さんの『な~んだこれだけか』のつぶやきに複雑な気持ちになる。そもそも今回の会山行は新人の訓練などを主な目的に計画されており新人が少なくては残念なのである。ともかく9時30分足尾を目指し出発する。

予定通り12時30分頃足尾に着き大堰堤の脇の駐車場にテントを張り、いつものように小宴会を行ないほろ酔い気分で眠りに着く。

次の朝、のんびり起きて回りを見回すと、なんか変である。堰堤にあるはずの氷柱が無いのである。目的の沢の氷の状態が気になる。黒沢の対岸まで車で進み、氷の状態を観察すると例年より氷

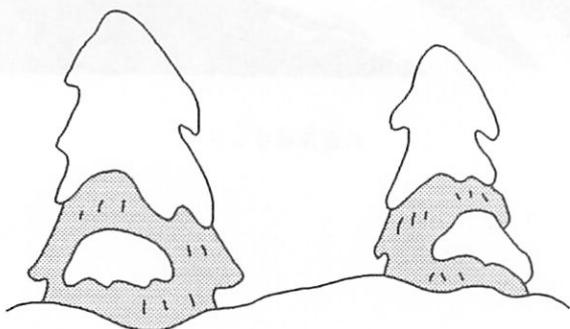
は発達していないが登れそうでホッとする。しかし黒沢には、もう数パーティ入っており我々は、次の横向きの沢に入ることにする。練習は、本図大先生の指導で行なわれる。まずアイスハーケンのセット仕方、ピッケルとバイルの使い方など一通りの基本的な技術の説明と大先生のデモンストレーションが行なわれる。

その後トップロープによる練習を各自何回か行なう。ピックの打ち込みがうまくいかない者や躊躇が上がり過ぎてアイゼンが不安定になる者など各自の問題点はあったが大先生の助言と本人の熱心な練習により驚くほど上達した。

午後には、下の左にある垂直のツララの部分も全員クリアする事が出来た。最後にトップで新人が登り練習を終了した。私が新人の頃には登れなかつた所もたった一日の練習で登れしまうのには驚いた。

ぜひ今日の練習の成果を谷川や穗高で実践してくれる事を願っている。

(鯉河 記)



赤岳主稜

1997. 1. 25~26

パーティ L 本図一統、高橋弘（浦和浪漫山岳会）、坂本恵美子、笹平孝

高崎インターで高橋さんと合流して、佐久経由で八ヶ岳へ向かった。佐久に入った処からは道路に雪が積もっていてアイスバーンの道になった。今回は美濃戸山荘まで来れたので少し得をした気分だった。

次の日、美濃戸山荘から行者小屋に向かった。雪が降ったせいで最後の頃トレールが無くなっていた。行者小屋に着いたらテントを張って、北稜へ出発した。雪でトレールは埋まっていたのでラッセルで進んだ。体力不足と吹雪のため、時間的に難しいので途中で敗退となった。テントに戻つてからは、ビールを買ってきて、早速酒盛りを始めた。高橋さんが日本酒、おつまみをたくさん持ってきてくれたのでとても豪華になった。

次の日も天気は悪かった。坂本さんは硫黄岳に行ける所まで行って、残り三人は赤岳主稜となつた。文三郎道を登つて行き、途中のハシゴを越えたところから左側に入つていくと取り付きに着いた。本図さんがトップで行く。1P目は少し難し

かった。2P目からは、簡単になるが、吹雪で声がほとんど聞こえなかった。気温も低いので手足も痛くなってきて頭の中は早く山頂に抜けたい、としか考えてない状態だった。途中、少し難しいところがあつたぐらいであとは問題なく山頂に着いた。山頂で予定変更して登つてきた古山さんと紺野さんに会つて、一緒に文三郎道を下りた。

今度来るときは、ぜひ晴れてほしいと思った。

1月25日 美濃戸(7:31)一行者小屋(11:29)
1月26日 行者小屋(7:20)ー取り付き(8:43)ー
北峰(12:00~12:15)ー南峰(12:18)ー
行者小屋(12:57~13:38)ー
美濃戸(14:49)

(笹平 記)

八ヶ岳・文三郎道～赤岳

1997. 1. 26

パーティ L 古山正文、紺野哲雄

1月26日深夜、美濃戸山荘の駐車場に到着し、車の中で日本登山大系を見ながら今日のルートを検討する。その結果5時起き、6時出発で赤岳主稜に決まり仮眠に入る。そのまま自分は熟睡してしまい『今、何時』と言う古山さんの声で目を覚ますと6時半頃でした。やってしましました。朝飯抜きで出発準備をいそいでするが、いつも古山さんを待たせてしまう。

6時47分に出発しまして、ひたすら歩く。そして1時間、朝飯抜きだしそろそろ休憩かな、いや出遅れたから休憩はまだだろうとか思い古山さんの様子を伺うが、休憩する気配はまったく無い。1時間半、気配無し、そして2時間いきなり目の前に小屋が見えた。行者小屋到着8時46分、ここで朝飯をアイゼン、登攀具を装着しながら食べて、ガスがかかった赤岳へ文三郎道をたどる。途中から左のトレールに入るがどうも違うらしい、再び左に入り、さっきより奥へ行ってみるがガス

で全体の様子がつかめない。少し上に向かってみると文三郎道が見えてきてしまう、だんだんと時間もなくなつてしまい、文三郎道をピストンする事にして、行動食を食べて文三郎道に戻ると一瞬がガスが引いた。『あった!』。あれが主稜だよ』と古山さんが指を指す。見た感じ長い。10ピッチぐらいあるらしい、時間的に考えて文三郎道を登る。頂上付近は、風が強く顔を打つ。頂上で本図パーティと合流し、下山。行者小屋で坂本さんと合流し、美濃戸山荘へと向かう。美濃戸山荘、到着午後2時52分。今回も無事下山し帰途に就いた。

(紺野 記)

妙義山

1997. 2. 23

パーティ L 告広道、新美達也、紺野哲夫、笹平孝、坂本恵美子

佐久まで行ったが八ヶ岳は中止ということになった。そして帰りがてらに上毛三山の一つである妙義山へと向かった。

登山コースは、妙義神社から大の字、白雲山、を経て最高峰の相馬岳まで約3時間30分。それなりに岩場はあるが鎖など手や足の置場がしっかりとていたので楽しむことが出来た。告さん、紺野さんはプラブーツを履いていた為、ある意味では冬合宿

よりも難しいと漏らしていた。

奇岩を連ねているせいか妙な雰囲気のする山だった。“柿〇〇〇死ね” & ワラ人形攻撃にはびっくりしたが面白かった。几帳面な字だったので女の仕業らしかった。

(坂本(恵) 記)



妙義山にて

会津磐梯山（山スキー）

1997. 3. 2

パーティ L 古山正文、坂本恵美子、本図一統

『あ～あ、やんなっちゃったな』。私は独り言をつぶやいた。古山と坂本ちゃんに遅れること200m。両名はすでにスキーをデボし、つぼ足で登っている。二人はもうすぐ頂上だろう。私は少しでも滑降距離を延ばそうとスキーを履いてきた。しかし、回りをみてもブッシュだらけで、どう考えても快適滑降など望めそうもない。裏磐梯スキー場を出発してからここまで、快適滑降ができそうな場所があつただろうか。俺の好きなのはスキー登山じゃねえぞ。

山スキーなんだ。快適滑降ができる山なんだ。誰だ、こんな山に行くべと言い出したのは。100名山ハンターの古山か、それとも坂本ちゃんか？・・・

・あっいけねー、よく考えたらこの俺だっけ。もう我慢できねー、スキーはやめた。頂上直下の斜面に板をデボした。ちょうど弘法清水小屋と同じ位の高さだろうか。ツボ足になった途端、もっと早くツボ足になるなんだったと思った。その位楽に感じた。頂上からの眺めは最高で、眼下に見える猪苗代湖は鏡

のよう輝いていた。東尾根を下降していく三人パーティが見えた。天気はますますなのだが、風が強く寒いので、写真一枚撮ってすぐ下山開始する。表面クラスト、中グサグサニモナカ雪+ブッシュ=最悪の滑降条件。なんちゅう山に来てしまったんだ俺は・・・。

どうも俺は磐梯山にはツキがない。若かりし頃、裏磐梯スキー場に来た帰り、凍結路面でスリップ、停車中のトラックに突っ込んだことがあった。密かに思っていた女性と猪苗代スキー場に來たが（二人きりで來たのではなく団体で）、内気な俺は言い出せず片思いに終わった、・・・などなどである。

自分のスキーデボ地点より古山達のスキーデボ地点までは、ブッシュの間を不快適に滑る。お世辞にも快適とは言えない。さらにそこから急斜面のトラバースで中の湯に向かうのであるが、これまた不快適。樹林の中でギルランデも使えない。斜滑降オナリーである。坂本ちゃんは滑るのを完全に諦め、板を背負って下りるという。まあまあ滑れたのは、中の湯手前200mといったところだった。中の湯で大休止、遅い昼飯にする。夏は賑わう温泉も、今は誰もいない閑散とした建物の脇に、ブツブツと熱い温泉が湧き出していた。中の湯から銅沼までの間はまずまずといった滑りができた。コース中一番快適に滑れたのは、悲しいかなゲレンデ内であった。ゲレンデに出た所で私は転倒してしまう。スキーをやる人ならわかると思うが、転倒には恥ずかしい転倒と、恥ずかしくない転倒がある。この転倒はアイスバー

ン化した雪面にコントロールを失い、後傾になつたための転倒で、非常に恥ずかしい思いをした。坂本ちゃんを待っていると、スキーバトロールが声をかけてきた。毎日磐梯山を見ているが、登ったことがないという。今年は是非スキーで登りたいとルートのことを聞かれた。そういうえば裏磐梯スキー場にも私と同期のバトロールがいたはずだが、名前も忘れてしまった。坂本ちゃんと合流し帰路についた。お天気まずまずで登頂はできたので、今日の山行は合格点としておこう。

リフト終点(9:16)ー頂上ー駐車場(15:52)

(本図 記)



磐梯山山頂にて（猪苗代湖をバックに）

谷川岳幽ノ沢左方ルンゼ

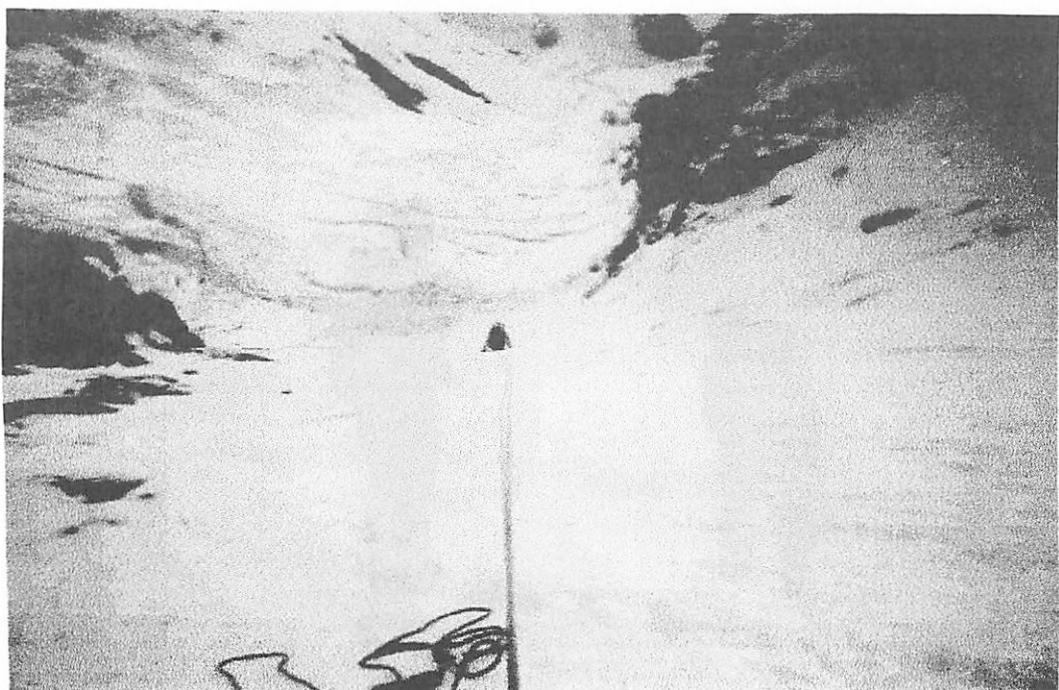
1997. 3. 20

パーティ L古山正文、本図一統

冬の谷川岳山行は早朝出発になるため、集合も少し早めの20時、下館。更に、渋川から高速を使い時間を稼いで23時過ぎにロープウェイ駐車場に着いた。すぐに仮眠を取る。1時半に目覚し時計の音で起こされ、無理矢理朝食を詰め込んで、準備して2時に出発した。幽ノ沢出合までは踏み跡があり順調に進む。

出合から取り付きまでは沢沿いに行く。二股を過ぎた処でアイゼンを着け、雪崩の跡を避けつつカールボーデンを登る。カールボーデン上部はクレバスが大きな口を開けていて、右に行ったり左に行ったり大きく跨いだりしてかわし、取り付きの比較的平らな部分に着く。登攀の準備をしていると、東の空に雲間からヘール・ポップ彗星が尾を引いて現れた。そういえば、去年の今ごろやはり幽ノ沢のノコ沢氷柱を登りにきたときには、百武彗星を同じように見上げたことを思いだした。明るくなり始めた頃、登攀開始。1P、傾斜の緩い雪壁と薄氷の壁のミックス。アイスクリュー2本でビレー。2P、緩い雪壁、部分的に硬い。岩にハーケンでビレー。3P、緩い氷壁を登り、核心の大滝下に着く。スクリューハーケン3本でビレー。4P、傾斜の強い氷壁（部分的にはきれいなブルーアイス）だが、適当なところに

傾斜の緩むところがあり、楽にランナーのスクリューハーケンを埋めることができた。気温の高いせいと、ピッケル、バイルとも良く研いできたため氷へのささりはよく快適なクライミングとなった。今回50mロープを持ってきたが、1Pでは大滝を抜けるのにはわずかに長さが足らず、大滝を抜ける5m位下でスクリュー3本でビレー。5P、残りの大滝の氷壁から、雪の詰まったルンゼとなった。氷と雪が半分半分位となっていた。雪の部分には踏み跡が階段状で残っていたので、だいぶ楽だった。中尾根側の氷壁にスクリュー2本でビレー。6P、引続き前と同様の状態、急傾斜のルンゼ。良いビレーポイントがなく、小さな木とロックハーケン2本で気休めのビレー。ルンゼの先を見ると大きな雪庇がルンゼ側に傾いていて崩れるかときがきではない。7P、同様のルンゼが続く。ビレーは右側の岩に、ハーケンを打つ。8P、まだルンゼの中であるが、完全な雪壁となった。ようやく危険な雪庇をかわすことができ一安心。右の岩から垂れたつらら氷でセルフビレーを取り、スタンディングアックスビレー。9P、ルンゼを抜け雪稜に出て終了。足元になった雪庇は上からみると、大きくなつて巻き込むようにルンゼ側に垂れてくつっていた。ちょうどハーケンの頭を岩に付けるように折れ曲げると強くなる



2ピッチ目の登攀

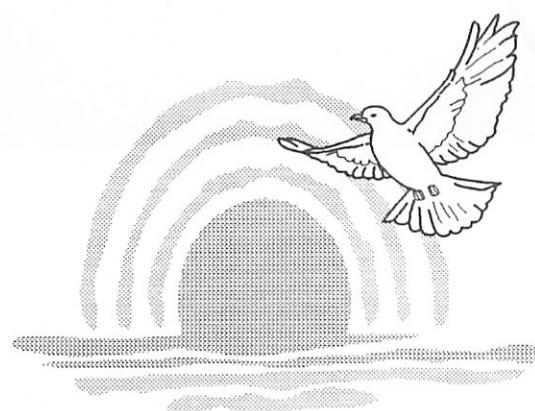
から、この雪庇も大丈夫なんじゃないと本図さんが冗談で言っていた。ガイドブックにはスクリューハーケン4~5本でよいし、同ルート下降もできるとあったが、完全に違っていた。ロープをしまい堅炭尾根まで踏み跡の付いた雪壁を登る。が、その踏み跡が大股なのでひどく疲れた。尾根に出たところで、行動食を食べて、少し休む。尾根を下り芝倉沢に下る中芝新道との分岐から更に50mほど尾根に沿って進と、堅炭岩のルンゼのコルに着く。雪が腐って嫌らしくなってきたのでルンゼを2P懸垂し、雪壁から尾根を下り、ブッシュを掘んで堅炭沢におりトラバースしてノコ沢に移り、腐った雪にはまりながら幽ノ沢出合手前まで尾根を下り、出合に着いた。後はのんびり来週来る予定の一ノ倉尾根の取り付きを研究しながら、ロープウェイ駐車場まで歩いた。そして、ユテルメによってから帰途に着いた。

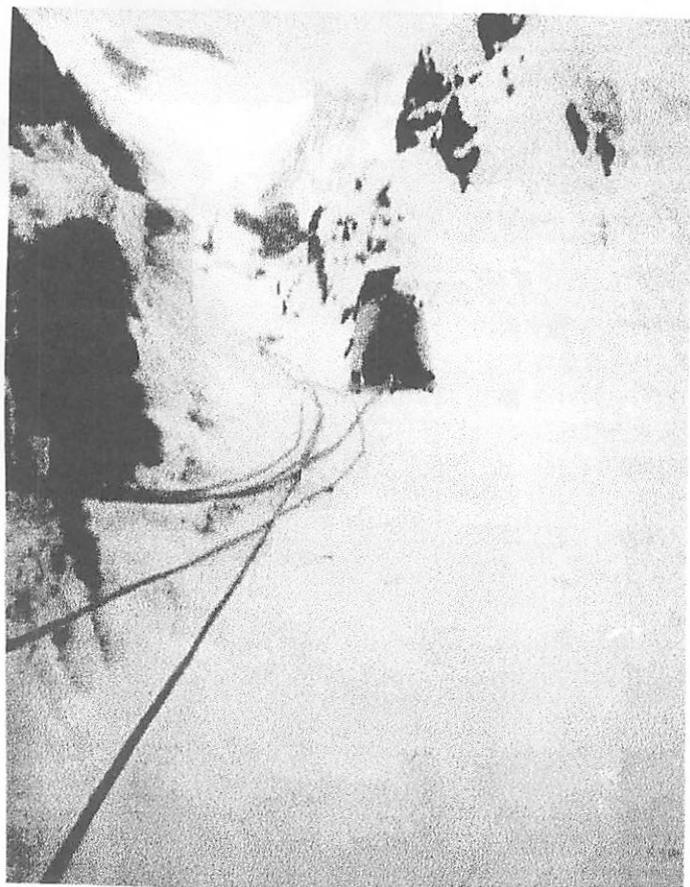
ロープウェイ土合駐車場(2:04)ー幽ノ沢出合(3:19)ー取付(4:34~5:24)ー登攀終了(9:48~10:11)ー堅炭尾根(10:42~10:54)ー幽の沢出合(12:46)ー一ノ倉沢出合(13:14~13:23)ーロープウェイ土合駐車場(14:16)

(古山 記)



3ピッチを行く（4ピッチが核心部だ）。





上部ルンゼを登る。

戸隠・P3稜

1997. 3. 23

パーティ L本図一統、告広道

先週は天気に見放されたが、今回はいけそうだ。ルートが長いこともあり、暗い内から動くと言われていたのにもかかわらずヘッドランプを忘れてしまい不安になる。本図氏が持っていた小さな懐中電灯を借りるが、いざという時のためになるべく使わないようとする。樹林帯を抜けて尾根に出ると右上にホール・ホップ彗星が見えた。そういえば昔から流れ星が見えている間に、3度願い事が言えれば願いがかなうというから、たくさん願い事を考えて繰り返した。さてよしかし、彗星は流れ星と言うべきなのかとか山にまったく関係のないことを考えながら歩いているうちにナマズ岩に着いた。ここでハーネスを着け、ザイルを出す。右端は切れていて高度感があり怖いのでなるべく左にルートをとる。20mぐらいで、傾斜も緩いので簡単だが、ドロっぽいところで支点が一本も取れないので緊張してのぼる。ここを過ぎるとザイルのいらない雪稜に出るがザイルを片付けるのがめんどうなのでコンテニュアスで行く。マッコウクジラ岩の左の急傾斜の樹林の中を1ピッチ登り再びコンテニュアスで岩場にでる。ここを1ポイントの人工で抜け、やせ尾根すこしに小ピークを上下すると核心部の岩場にでる。なんとなく利尻南稜バットレスに似た感じだ。岩質は大きな砂利を含んだボロボロのコンクリートみたいで少し

登ったところでホールドが取れて落ちてしまった。スタンディングアックスでビレイをとっていた本図氏はあせったに違いない。

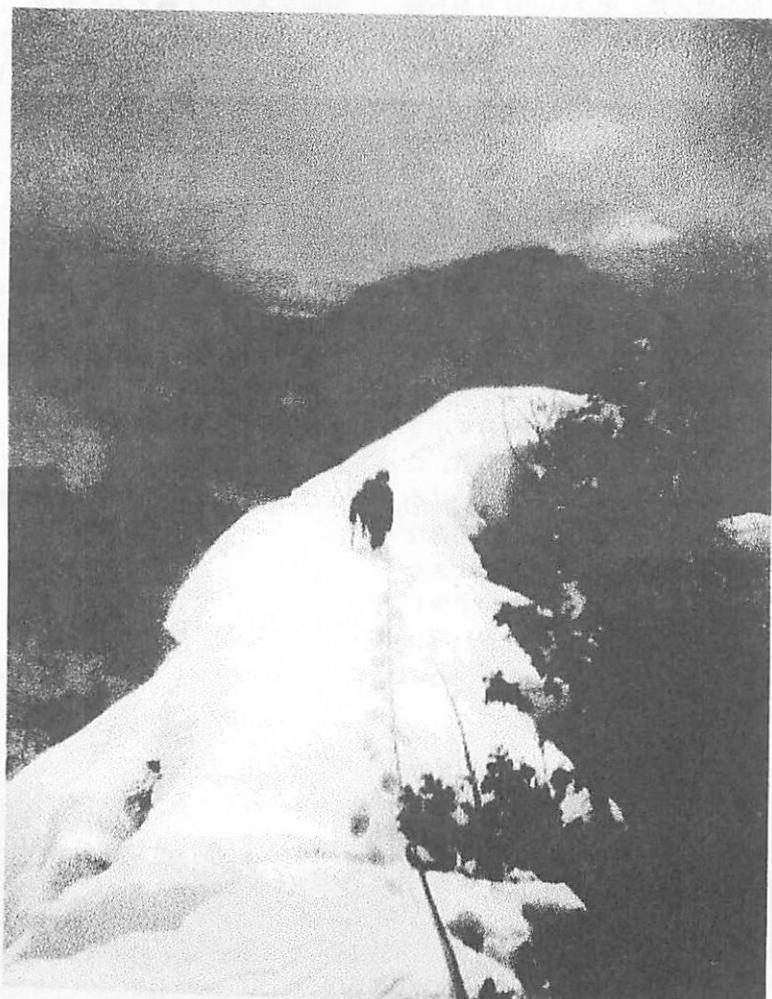
気を取り直してボルトにピッケルをかけながら登っていく。出口付近は、支点がないので注意を必要とする。バンドを左にトラバースし大きな木でビレイ。急斜面を木登りで越えると雪稜に出た。傾斜がきついのでザイルを付けたままP3頂上まで行く。頂上では天気が良く白馬方面の山々が良く見えた。よく見るとP1にもパーティがいるのが見える。まだ時間もあることだしP1稜を下ろうということになりP1に向かう。雪庇に注意しながらノーザイルでP1頂上。あとはいやに長いP1稜をとここまで下って行った。道路に出たところで、上楠川村の集会場でTELを借りることにするが、何か宴会をやっているようで、からまれそうだったのでおとなしそうな人に声をかけ、電話を借りタクシーを呼ぶ。品沢高原まで送ってもらい終了。

下館(20:00)ー品沢高原(23:30)ー出発(4:00)ーナマズ岩(6:00)ーP3頂上(11:52)ーP1頂上(13:20)ー集落(17:20)ー品沢高原(17:40)ー下館(11:30)

(告記)



朝日に映えるP3稜



P 3 稲を行く



P 3 頂上にて

会津駒ヶ岳～大戸沢岳北東稜 山スキー

1997. 3. 23

パーティ 古山正文

今月初めに、磐梯山に山スキーに行ったが、快適な斜面とは言えず不満足であった。唯、天気が良く山頂からの猪苗代湖の眺めは最高だったのだが。そこでいろいろ考えた末、会津駒ヶ岳に行ってみることにした。太平洋側は天気が悪いとの予報だったのでどうかと思ったが、松枝岐に着く頃にはやはり雪が舞い始めた（しかし、結局麓では積もることはなかった）。滝沢橋を少し入った公衆トイレの所まで除雪してあり、そこまではいって駐車し仮眠を取った。朝6時の村のチャイムに起こされ、準備して出発。すぐにシール登行でつづら折れの車道を進み、夏の登山道入口の階段を過ぎ車道の終点から左のルンゼを稲妻形に更にスキーアイゼンを装着して登り尾根に出る。人気ルートで、赤布が沢山付けてある。上の方は昨夜の雪がだいぶ降り積もっていたが、先行が沢山いるようでスキーの跡がバッチリついていて、ラッセルすることはなかった。樹林がなくなりながらかな雪の斜面を進と、半分雪に埋まった駒の小屋に着き、そこから北に少しの登りで会津駒ヶ岳山頂に着いた。先行パーティは同ルートの滑降か南のキリンテの方へ行くらしく山頂からシールをはずして滑り下りて行った。山頂から北東の大戸沢岳へは今日はまだ誰も行っていないようで、新しいスキ

一歩行の跡はなかった。今日は天気が良く目的の山頂はよく見えてるので、ルートの心配は全く無いが（せっかくのGPSが使えないのがちょっと残念）、ガスられたらなだらかな広い尾根なので迷いやすいだろう。案の定、その対策としての篠竹に結ばれた赤布の目印が短い間隔で埋められていた。大戸沢岳からいよいよ滑降開始である。しゃっぽながらこのルート最大のお楽しみの大斜面となるが、木がほとんど無いので少しばかり雪崩が恐かった。大斜面が終わると尾根状になるが、樹間も広く滑り易い。尾根末端に近づくにつれ、傾斜が急になったのと、樹間が狭くなったのと、雪が腐ってきたとの三重苦となつたが、すぐに国道（トンネルの出入口の所）に出て終了。大満足の山スキーだった。後は、スキー、ザックをデボして車を取りに約4Kmの車道をてくてくと歩いて戻った。

滝沢橋(6:50)－会津駒ヶ岳山頂(10:00)－大戸沢岳(10:40)－国道(13:00)－滝沢橋(13:40)

(古山 記)

谷川岳（天神尾根）

1997. 3. 29

パーティ L 菊池光夫、坂本恵美子

今日は3月の会山行である。谷川岳天神尾根の山行である。パートナーは何時もならコンビを組んでいる広瀬氏であるが、今日は花も恥じらう乙女の坂本さんと2人の山行である。

谷川警備隊の小屋に12時半頃到着して小屋の中を見ると、ACC-J茨城の一ノ倉尾根へ行くメンバーが早朝発の為、仮眠を取っていた。起こすと悪いので足早に車へ戻り、居酒屋気分で2人で呑み始める。ACC-Jのいつものメンバーとは一味違った会話と西暦1960~70年代のCDを聞き、ワイン、ビールを持ってきたアルコールを全て空にして寝た。

朝起きて、警備隊小屋に行くと小屋の中は無人で、計画書が箱に提出してあった。

我々も朝食を取りスキー板を担いで、ロープウェイ乗り場へと向かう。スキーヤーとスノーボーダーの人達で回りは一杯だった。ロープウェイとリフトを乗り継いで上まで行く。そこでスキー板と靴をデボして雪面をザックザックと足取りも軽く歩き出す。

1時間も歩くと息が切れ、坂本さんは一足先を行く。途中一ノ倉尾根パーティと交信。天気は曇りで上部の方はガスがかかり視界はあまり良くなかった。

肩の小屋にザックを置き、山頂へ向かう。山頂は、風も強くいつまでも居られなかつたので熱いKissでななく堅い握手をして小屋に戻る。小屋では数人のパーティが昼食をとっていた。我々もバーナーを使い、昼飯・コーヒータイムと時を過ごす。小屋で1時の交信をする。

一ノ倉尾根パーティは順調に登っており、今、核心部でナイフリッジ状の尾根を通過中であるとの内容であった。我々も ゆっくりと下ることにする。難無くリフト終点の所まで行き、休憩後3時の交信をする。

『J I 1 Y A L、オペレーター告、入感ありますか？どうぞ！』と声をかけると元気良く告が『ただいま、5ルンゼの頭付近です。出来れば国境稜線まで行きたいのですが、みんなかなり疲れているので、ビバークになりそうです。』との内容であった。『了解しました。我々これで下山します。下山したら下山連絡を必

ず入れてくれと頼んで交信を終了する。

いよいよ、これよりスキーで下降予定であったが、何と私はスキー板と靴が合わないのを持って来てしまった為、バトロール小屋へ行ってドライバーを借りれば使えるのでスキー場の外側を下降。彼女には、スキー板を履いて斜下降で下りろと指示をする。最初は1人で滑り出したが、途中真中辺で立ち止まりかなりぐずっていた。下から見ると内容がわからず、とうとうスキーを外し、板を担いで歩き始めた。下で内容を聞くと急斜面なので恐いとの事であった。私は歩くのはへっちゃらなんだけどスキーはあまり得意でないとの事。そのためこれより先は谷筋を滑るので安全のためにロープウェイで下る。無事下山をして、熱いKissでは無く堅い握手をする。

その後、月夜野より少し行った湯宿へと向かう。彼女は湯宿は初めて『温泉は混浴じゃないよね？』と訪ねた。大丈夫100円では入れる町営の温泉と説明する。入浴後料金箱に100円入れてきたかと聞くと彼女は菊池さんと同じだけ入れてきたとの事。じゃ、無賃だな。

彼女はACC-J茨城の他のメンバーは鳥の行水

だと言っていたので他のメンバーはチンポしか洗わないんだよと説明すると彼女は変に納得していた。という訳で今回の山行の報告を終わりにいたします。

(菊池 記)

谷川岳 一ノ倉尾根

1997. 3. 29~30

パーティ L 古山正文、告広道、紺野哲雄、澤田仁

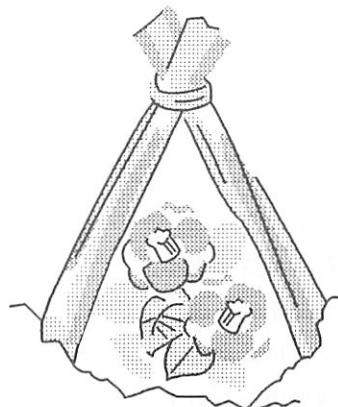
今回の会山行は一ノ倉尾根である。

金曜日の夜8時に下館に集合し、避難小屋に1時過ぎに到着。2時まで仮眠を取り、3時に出発した。尾根の末端から取り付く。第一岩峰から告氏と紺野氏、古山氏と澤田の組み合わせで登攀を開始する。しばらくアップダウンのある岩稜が続き、12ピッチほどで懸垂岩にたどり着いた。ここはA1で、ほんの5、6mの高さなのだが、人工登攀の経験の浅い自分はかなり時間をロスしてしまった。古山氏からフィフィがうまく使えていないと指導を受けた。数ピッチで岩場をぬけ、ダイレクトルンゼをつめる。このルンゼはカチカチに凍っていて、ダブルアックスで登る。五ルンゼの頭から岩稜をたどるが、この辺りから夕闇が濃くなってきた。先行している告、紺野両氏は稜線上にビバークサイトを作るが、古山氏は『風がよけられない。』と言って却下。そしてしばらく行ったところに、岩が幽ノ沢側にせり出している処があり、その岩の陰にツェルトを2つ張った。

始めは狭くて横になれないと思われたが、実際に張ってみるとなかなか快適であった。軽量化の為シュラフは持ってこなかったので、着れるものを全部着て就寝する。寒くて震えが止まらなくてとても眠れそうにない。朝まで一睡もできなかったと思ったが、古山氏によると自分はすやすやと寝息を立てていたらしく、意外な気がした。

次の日、広い雪稜を少し登るとすぐに一ノ倉岳に到着した。よく晴れていて大変気持ちが良い。国境稜線をたどってオキの耳まで行く途中、張りだしている雪庇を見て、古山氏が『あの端まで行ったら100万円やる。』と言ったのが印象的だった。西黒尾根から下りるが、にわかに雲行きが怪しくなってきた。下山して車に乗り込んだ時にはもう雨が降っていて、危うくずぶ濡れになるところだった。湯テルメで汗を流して帰途についた。

(澤田 記)



ACC-J茨城会則

第1章 総則

(名称)

第1条(1) 本会は、Alpine Climbing Club Of Japan茨城と称す。

(2) 略称をACC-J茨城と称す。

(所在地)

第2条 ACC-J茨城事務局を会長宅におく。

(会の構成)

第3条 本会は、ACC-J茨城会員、O.B及び会友で会則に賛同した者で構成する。

第4条 本会は、茨城県山岳連盟に加盟する。

第5条 本会員は、本会則の各章各条の規定を厳守せねばならない。

第6条 本会は、会活動を通じて会員相互の親睦を計り、登山に関する知識、技術を習得すると共に、体力の鍛錬をもって冬期岩壁登攀を目的とする。

第7条 本会は、J.I.YALのコールサインを持つ、アマチュア無線局を有する。

第2章 組織

第8条 本会は、会長1名を会員より選出する。

第9条 本会は、チーフリーダー1名を会員より選出する。

第10条 本会は、事務局長1名、会計監事1名を会員より選出する。

第11条 本会会長は、必要に応じて会員及びO.Bを召集することができる。

第12条 本会会活動の目的を達成する為、リーダー会を置く。

第13条 本会チーフリーダーは、必要に応じてリーダー会を招集することができる。

第14条 リーダー会は、会長、チーフリーダー、事務局長、会計監事及びリーダー会員で構成する。

(1) 会長は、唯一の会の代表者である。

(2) 会長は、茨城県山岳連盟理事を1名選出する。

(3) 会長は、リーダー会員を若干名選出する。

(4) 会長は、必要に応じて副会長1名を選出できる。

(5) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、それを代行する。

(6) リーダー会は、総会の決議事項を尊重する。

(7) リーダー会は、会員より退会したい旨の連絡があった場合、支障のないことを確認（会費滞納、装備借用、その他）の上、承認する。

(8) リーダー会は、会員より休会希望、休会期間の延長希望、及び、休会中の他会への入会希望があった場合、承認、不承認を決定する。

- (9) リーダー会は、会員よりO. Bになりたい旨の連絡があった場合、承認、不承認の決定をする。
- (10) チーフリーダーは、会員又はO. Bの遭難の報を受けた時は、直ちに救助隊を編成、出動の指揮をとらなければならない。
- (11) チーフリーダーは、必要に応じてサブリーダー1名を選出できる。
- (12) サブリーダーは、チーフリーダーを補佐し、チーフリーダーに事故あるときは、それを代行する。
- (13) 事務局長は、会長、チーフリーダー、会員との連絡を密にとり、事務局運営にあたる。
- (14) 事務局長は、会計、集会議事録、山行記録、会員募集、会報発行、山岳保険、会装備などを管理しなければならない。
- (15) 事務局長は、必要に応じて事務局長代理1名、及び事務局員数名、会報編集長1名を選出することができる。
- (16) 事務局長代理は、事務局長を補佐し、事務局長に事故あるときは、それを代行する。
- (17) 事務局員は、事務局長多忙の時は、それを手伝う。
- (18) 監事は、年1回会計監査を行う。
- (19) 会報編集長は、年4回、会報を発行する。
- (20) 会報編集長は、必要に応じて編集員数名を選出することができる。

- 第15条 リーダー会は本会の運営機関であり、決議に対して本会員は誠意をもって協力しなくてはならない。
- 第16条 会長は、その権限内において処理すべき問題が生じた場合、その問題が重大で、会長個人で処理することが困難な時は、リーダー会で協議決定する。
- 第17条 チーフリーダーは、その権限内において処理すべき問題が生じた場合、その問題が重大で、チーフリーダー個人で処理することが困難な時は、リーダー会で協議決定する。
- 第18条 事務局長は、その権限内において処理すべき問題が生じた場合、その問題が重大で、事務局長個人で処理することが困難な時は、リーダー会で協議決定する。
- 第19条 リーダー会は、会員、もしくは入会しようとする者が、第46条(1)、(2)項にかかる決定を希望した場合、速やかに承認、不承認の決定をしなくてはならない。
- 第20条 リーダー会は、会員及びO. Bが本会員にふさわしくない行為（無断山行を含む）があった場合、これを除名処分、又は、退会処分にする権限を有する。
- 第21条 リーダー会は、年度末にその年の登攀賞表彰者を選出し、総会時表彰する。
- 第22条 会長、チーフリーダー、事務局長、リーダー会員の任期は、2年（冬山合宿後から翌々年度冬山合宿終了まで）とする。但し、再任は妨げない。

第3章 会計

- 第23条 本会の運営は、会員よりの入会金、会費、及びO. B会費をもって行う。
- 第24条 会計年度は、1月より12月までとする。

- 第25条 会費は月1000円、入会金は5000円、O.B会費は年3000円とする。
- 第26条 会費及び入会金、その他会員より徴収する経費の変更は、総会において決議する。但し、緊急的に一時徴収が必要になった場合（会装備購入など）は、集会時、協議決定しても良い。

第4章 総会

- 第27条 総会は、会員の2/3以上の出席（委任状を含む）をもって成立する。
- 第28条 定期総会は、年1回とし、臨時総会は、必要に応じて会長が召集する。
- 第29条 総会は、会計報告、年間活動及び必要議決事項を協議決定する。
- 第30条 協議事項は、出席者（委任状を含む）の過半数の賛成をもって議決される。

第5章 会報

- 第31条 本会は、年4回、会報を発行する。
- 第32条 会報の誌名は、R&V (Rock and Valley) とする。
- 第33条 会報の編集は、編集長及び編集員が行う。
- 第34条 編集長は、会員に提出期限をつけて原稿を依頼することができる。
- 第35条 会員は、編集長から依頼された原稿を提出期限内に提出しなければならない。但し、正当な理由あるときはこの限りではない。

第6章 会員制度

- 第36条 会員は、入会金及び会費を支払わなければならない。
- 第37条 会員は、会山行及び集会に出席しなければならない。集会に欠席もしくは遅刻する場合は、あらかじめチーフリーダーに連絡しなければならない。
- 第38条 会員は、会費未納6カ月以上、及び会山行、集会等に6カ月以上連絡のない者は退会処分になることがある。
- 第39条 会員は、全員、山岳保険に加入しなければならない。（受取人は本会とする）第40条 会員は、できるかぎりアマチュア無線局免許を取得する。
- 第41条 会員は、会装備を使用できる権利を有する。
- 第42条 会員は、会装備を使用する時は、あらかじめ事務局長に許可を取らなければならない。
- 第43条 会員は、会装備を使用した後は、出来る限り速やかに、事務局長に返さなければならない。
- 第44条 会員は、会装備を紛失、又は破損した場合は、弁償しなければならない。但し、正当な理由ある時はこの限りではない。
- 第45条 会員は、本会員にふさわしくない行為があった場合、除名処分されることがある。
- 第46条 会員は、他会との重複加入は認めない。但し、次の（1）、（2）については認めること

もある。

- (1) 学校内の同好会、職域山岳会
- (2) 遠方からの長期出張者で、すでに入っている会を休会中の場合。

第7章 合宿制度

第47条 合宿は、春、夏、冬の3回行う。

第48条 合宿は、全員参加を原則とする。

第49条 合宿参加者は、参加申し込みをチーフリーダーに、申し込み期限内に連絡する。

申し込み期限を過ぎた者は、参加を拒否されることがある。

第50条 合宿は、リーダー会に於いて計画し集会で発表する。

第51条 合宿同日程の個人山行、及び会員外との山行は原則として認めない。

第8章 登攀賞

第52条 会員より1名、その年（1月～12月）に最も素晴らしい登攀、または精進努力した者を表彰する。但し、一定水準に達した者がいなかった場合は、表彰しない。

第53条 表彰の賞品は、5000円相当の山に関する物とする。

第9章 入会、休会、復会及び退会

第54条 入会希望者は、所定の必要書類に必要事項を記入し、チーフリーダーに提出し、入会金、会費、その他（山岳保険など）の経費を事務局に納めなければならない。

第55条 休会希望者は、その旨をチーフリーダーに連絡し、リーダー会の承認を得なければならない。但し、在籍期間などによって承認されないこともある。

- (1) 休会者は、その期間中、会費を免除する。
- (2) 休会期間は、最長2年までとする。但し、正当な理由がある場合はこの限りではない。
- (3) 休会者は、その期間中、本会会員との山行を禁止する。但し、リーダー会が認めた山行については、この限りではない。
- (4) 休会者は、その期間中、遭難した場合、本会としての救助隊は派遣しない。
- (5) 休会者は、その期間中、会員にふさわしくない行為があった場合、除名処分にする。
- (6) 休会者は、その期間中、他会に入会することができる。但し、休会者が遠方への長期出張などでリーダー会が承認した場合に限る。
- (7) 前項（6）の者が復会する場合には、その会を退会しなければならない。
- (8) 休会者は、復会する場合、入会金を免除する。

第56条 退会希望者は、リーダー会にその旨を連絡しなければならない。

第10章 O. B &会友

- 第57条 O. B&会友になるには、クラブに貢献実績があり、リーダー会の承認を得た者に限られる。在籍期間などによって承認されないこともある。
- 第58条 O. B及び会友は、会運営に参加できない。
- 第59条 O. B会費は、年間3000円とする。会友は会費無料であるが、第60条～第66条に関する権利、義務、制限も有しない。
- 第60条 O. Bは、なるべく山岳保険に加入する。
- 第61条 O. Bは、会報を自宅まで郵送される権利を有する。
- 第62条 O. Bが会装備を使用する時は、会員が使用しない時に限られる。（会員が優先される）
- 第63条 O. B及び会友は、会員、又はO. Bが遭難した場合、できる限り救助に出動しなければならない。
- 第64条 1年間以上、会費納入がなかったO. Bは、このO. B資格を失う。
- 第65条 O. Bは、O. Bたるにふさわしくない行為があった場合、除名処分となる。
- 第66条 O. Bは、復会する場合、入会金を免除する。

第11章 会山行、個人山行、O. Bの山行 会友の山行、会員外との山行、無断山行

- 第67条 会山行は、原則として月一回定期的に行われる。
- 第68条 会山行は、全員参加を原則とする。
- 第69条 会山行は、訓練山行を主体とするが、集中山行、新人歓迎山行なども含まれる。第70条 会山行は、リーダー会に於いて計画し集会で発表する。
- 第71条 会山行同日程の個人山行、及び会員外との山行は原則として認めない。
- 第72条 個人山行は、計画書をチーフリーダーに提出し、チーフリーダーが承認した後、実行する。但し、当日前夜、電話連絡でも承認する場合がある。チーフリーダー不在の場合は、サブリーダー、会長、事務局長でも良い。電話連絡の場合、出発前に必ず計画書を書き、会専用ファックスに送っておかなければならない。（山岳保険の関係）
※ここでいう個人山行とは、会員、O. Bもしくは会友との山行のことをいう。
- 第73条 個人山行は、終了した時点において、即刻チーフリーダーにその旨、連絡しなければならない。
- 第74条 会員外との山行は、計画書をチーフリーダーに提出し、承認された後、実行しなければならない。
※ここでいう会員外との山行とは、会員、O. Bもしくは会友以外との山行のことをいう。
- 第75条 会員は、会員との山行を最優先し、会員外との山行が中心になってはならない。
- 第76条 会員外との山行は、終了した時点において、即刻チーフリーダーにその旨、連絡しなければならない。
- 第77条 本会の他、学校内の同好会、職域山岳会に所属している者が、それらの行事の山行をする

場合、あらかじめ山行計画書をチーフリーダーに届けでなければならない。

第78条 チーフリーダーが不承認した山行を強行した場合、退会処分となる。

第79条 無断山行を行った者は、無断山行を行った時点に於いて退会処分になる。

(1) ここでいう山行とは、ハイキング等全ての山行を言う。

(2) ここでいう山行とは、ゲレンデスキーは含まない。

(3) ここでいう山行とは、岩登りゲレンデのトレーニング山行も含まれる。但し、人工壁は含まない。

(4) 無断山行か無断山行でないかの最終判断はリーダー会がする。

第80条 山行終了後、代表1名は集会にて山行報告をしなければならない。

第81条 O, B山行もしくは会友山行を行う場合、なるべくチーフリーダーに届け出なければならない。

※ここでいうO, B山行とは、O, BがO, Bか会友か会員外と、会友山行とは、会友が会友と、もしくは会員外との山行のことをいう。

第12章 ザイル祭

第82条 本会のザイル祭を、ナーゲル祭と呼ぶ。

第83条 会員の安全を祈願し、会員同士の親睦を深めるため、年1回、ナーゲル祭を行なう。

第84条 ナーゲル祭は、会員、O, B、会友等全員参加を原則とする。

第13章 遭難救助策

第85条 会員又はO, Bが遭難した場合には、チーフリーダーは、リーダー会に連絡し、遭難救助隊を編成しなければならない。但し、会友山行において遭難した場合は、本会としての救助隊は原則として派遣しない。チーフリーダー、サブリーダーが不在の時は、その時点で適任と思われる者が代行する。

第86条 全会員は、遭難救助に出動しなければならない。正当な理由なくして拒否できない。但し、会友山行において遭難した場合は、出動する義務はない。その場合、個人の責任において出動するのは一向にかまわない。

第87条 チーフリーダーは、承認した山行の下山予定時間を過ぎても下山報告がなかった場合、リーダー会と協議の上、その時の時期、気象条件、ルートなどによって、出動時間を決定しなければならない。

第88条 会長は、本会だけで救助できない時、もしくは救助することが著しく困難と判断したときは、ACC-J東京、茨城県山岳連盟山岳救助隊、及び、ヘリの使用を含めた最良と考えられる救助を依頼することができる。但し、会長が不在の時は、その状況に一番適任と思われる者が代行できる。

第89条 会員、又はO, Bが遭難した場合、本会の遭難救助隊の指揮はチーフリーダーがとらなければならない。但し、チーフリーダー、及びサブリーダーが不在の時は、その状況に一番

適任と思われる者が代行できる。

- 第90条 遺難救助隊の諸費用は、山岳保険で賄う。但し、山岳保険で賄いきれなかった場合は、当事者が負担しなければならない。
- 第91条 本会の他、学校内の同好会、職域山岳会に所属している者が、それらの行事の山行において遭難した場合、本会としての救助隊は派遣しない。但し、個人の責任において出動するのは一向にかまわない。
- 第92条 遺難パーティの中に山岳保険未加入の者がいた場合（たとえば会友など）、その者の負担分は、全額個人負担となる。
- 第93条 茨城県山岳連盟山岳救助隊員になっている者は、茨城県山岳連盟より出動の依頼をうけた時は出動しなければならない。

第14章・交通費用、交通事故関係

- 第94条 山行の際、交通機関にマイカーを利用した場合、本会規定によって交通費用は平等に負担しなければならない。
- 第95条 山行の際、交通機関にマイカーを利用した場合、運転は全員平等に行わなければならない。但し、運転免許を取得していないものはこの限りではない。
- 第96条 山行の際、交通機関にマイカーを利用した場合、移動中は、運転する者しない者共に、行き帰り、車中車外にかかるわらず、いっさいの飲酒を厳禁する。
- 第97条 マイカー利用中、何らかの理由にて、それが故障破損した場合、その修理費用は当事者が協議し、負担しなければならない。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した事故については、運転手本人が負担しなければならない。
- 第98条 マイカーで移動中、交通違反にて課せられる罰金及び反則金は、当事者で平等に負担する。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した事故については、運転手本人が負担する。
- 第99条 山行に使用するマイカーは、任意保険（対人無制限、対物1000万以上、搭乗者1000万以上）に加入していかなければならない。
- 第100条 山行に使用するマイカーは、年齢条件、21才未満無担保を最低条件とする保険に加入しないなければならない。
- 第101条 山行に使用するマイカーは、なるべく車両保険に加入していかなければならない。第102条 不幸にして交通事故発生の時の事故処理は
- (1) その山行が、合宿か会山行の場合、交通事故処理委員会が行うが、賠償請求等、解決に至るまでの交渉は、当事者及び車両所有車が保険会社を介して行う。会長は、事故発生後速やかに、交通事故処理委員会を設置しなければならない。交通事故処理委員会のメンバーはリーダー会の他、事故当事者、必要に応じて会員から選出した者で構成する。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した事故については設置しない。
- ※交通事故処理委員会を設置するのは、集合場所から目的地、そして解散場所までの範囲で発生した事故とする。

(2) その山行が、個人山行、O. B山行、会友山行、会員外との山行の場合の事故処理は、当事者が行わなければならない。

第103条 交通事故による損害賠償問題が発生した場合、任意保険を使用するが、任意保険補償額を越えるような高額なときは

(1) その事故が、前条(1)の場合、全会員は、各自、個人個人において、できるかぎりの金銭的援助をすること。また、交通事故処理委員会は、O. Bに対してもカンパを募ることができる。但し、常識を著しく逸脱した運転により発生した事故については、全会員、及び、交通事故処理委員会は関知しない。

(2) その事故が、前条(2)の場合、当事者が協議し、支払わなければならぬ。

第15章 命祭規定

第104条 会員、会員の親、会員の配偶者、及び会員の子供が亡くなった場合、本会規定によって香典を供する。

第105条 O. Bが亡くなった場合、本会規定によって香典を供する。

第106条 会員が結婚した時は、5000円相当の記念品を贈呈する。

第16章 改正

第107条 本会の会則の改正は、リーダー会を通じ、総会にて会員の過半数の賛同をもって行われる。但し、軽微な改正については、集会にて行われる。

第17章 附則

第108条 本会則は、平成9年6月4日より効力を発する。

《友好山岳団体の月報、会報、その他》

ありがとうございました

月報

- ◎Rohman NO.141 1997.1 B5 34P 浦和浪漫山岳会
越後・大割山、上越・高棚ノ頭、巻機山荷上げ、冬山合宿 上越・三ツ石尾根、金城山、巻機山周辺ほか
- ◎Rohman NO.142 1997.2 B5 24P 浦和浪漫山岳会
越後・唐松山南東尾根、房総・高宕川本流、小櫃川キンダン沢、八ツ・赤岳主稜ほか
- ◎Rohman NO.143 1997.3 B5 28P 浦和浪漫山岳会
冬の集中 五頭山に三隊に分かれて集中、下田・烏帽子岳ほか
- ◎月報・ZAC NO.178 1996.7 B5 17P グループ・ゼフィルス
浅草岳、丹沢・四町四反ノ沢、和賀・生保内川～朝日岳～部名垂沢下降、男鹿・大蛇尾川下部、阿武隈川白水沢、南沢、大菩薩・小室川谷ほか
- ◎月報・ZAC NO.179 1996.8 B5 24P グループ・ゼフィルス
南ア・尾白川本谷、白神・大川～善知鳥沢～赤石川～暗門川、朝日・金目金本流、南ア・小仙丈沢ほか
- ◎月報・ZAC NO.184 1997.1 B5 18P グループ・ゼフィルス
東北・後生掛温泉、尾瀬岩鞍スキー場～西山～戸倉、八幡平、南会津・大平山、北海道・紋別岳、無意根山、奥秩父・武甲山ほか
- ◎わらじ NO.490 1997.1 B5 18P わらじの仲間
1997年度の活動方針ほか
- ◎わらじ NO.491 1997.2 B5 26P わらじの仲間
冬合宿 二王子岳～赤津山～門内岳～棍川尾根～長者原、焼峰、水晶尾根、丸森、等各ルート、爺ヶ岳ほか
- ◎わらじ NO.492 1997.3 B5 16P わらじの仲間
足拍子岳クロガネの頭北尾根、戸隠・本院岳マイナーリッジ、金時山ほか
- ◎逍遙 NO.68 1997.1 B5 9P 逍遙溪稜会
笛子川・滝子沢左俣、八ツ・赤岳、鶴川・鶴川大群沢、八ツ・西岳ほか
- ◎逍遙 NO.69 1997.2 B5 21P 逍遙溪稜会
五竜岳、奥多摩・北秋川神戸川水ノ戸沢、奥多摩・馬頭刈尾根、仙元峠、谷川・小出俣山、那須・甲子山ほか
- ◎逍遙 NO.70 1997.3 B5 12P 逍遙溪稜会
丹沢・表尾根、八ツ・横岳、谷川・仙ノ倉北尾根、丹沢・大山川、滝子山ほか
- ◎Next! No.13 1997.1 B5 16P 山岳渓流釣り集団むげん
幕岩、無線機でストレス発散、丹沢を考える、擦り減った魔法の靴、クライミングシューズ買い替えたほか
- ◎Next! No.14 1997.2 B5 30P 山岳渓流釣り集団むげん
広沢寺、幕岩、日和田、重油流出事故に思う、初めての経験、サラリーマンほか
- ◎Next! No.15 1997.3 B5 24P 山岳渓流釣り集団むげん
幕岩、つづら岩、はまってます、ちょっと疲れた時の一品、インターネットにはまりそうほか
- ◎とまのかぜ No.50 1997.1 B4 P 童人とまの風
西表島・浦内川板敷川～ユツン川、シオジの樹を求めてほか
- ◎とまのかぜ No.51 1997.2 B4 P 童人とまの風
奥秩父・大荒川谷、西表島紀行その2ほか
- ◎とまのかぜ No.52 1997.3 B4 P 童人とまの風
御坂・コウモリ沢、五頭山塊縦走、阿寺山、西上州・貧乏神の氷瀑、二王子岳、山の遭難に学ぶ安全と危険ほか
- ◎山紫水明 No.25 1997.1 B5 28P 山旅の会
木曾駒ヶ岳、富士山雪上、鹿島槍ヶ岳ほか
- ◎溪游 NO.91 1997.1 B5 20P 溪行同人 溪游会
丹波・長老ヶ岳、大峰・前鬼川孔雀又谷、鈴鹿・石谷川本流、播州・雪彦山、南紀・高田川内鹿野谷、ペルー

- アンデスプランカ山群、関東・甲武信岳、雲取山、両神山、金峰山、瑞牆山、天城山ほか
◎溪游 NO.92 1997.3 B5 12P 溪行同人 溪游会
菊水ルンゼ～鍋蓋山、越百山、大峰・普賢岳ワサビ谷、丹波・虚空蔵山ほか
◎すずらん通信 NO.190 1997.1 B5 8P 鈴蘭山の会
東北・八幡平～大深岳～松川温泉、日光・奥白根、十勝岳、ご隠居訪問ほか
◎すずらん通信 NO.191 1997.2 B5 10P 鈴蘭山の会
グランデコスキー場～西大巔、北ア・焼岳、八ツ・赤岳、ご隠居訪問ほか
◎すずらん通信 NO.192 1997.3 B5 18P 鈴蘭山の会
冬山レスキューリーダー養成講座参加報告、白砂山、かぐらスキー場～神楽峰、梅峰、尾瀬沼、北ア・十
石山、信越・黒姫山、ご隠居訪問ほか
会報・記録集・報告書
◎通信・植村冒険館 NO.8 1997.1 A4 P 植村記念財団
米最高峰マッキンリー、寄贈会報一覧(なぜ当会の名前は載らないのか?)

以上閲覧したい方は本図まで

《編集後記》

『あなたは、夢を持ち続けていますか？』と聞かれたら、自分はどう答えるだろうか？いろいろな夢が頭で交差してしまって答えに詰まってしまう。

何故、こんな事を話すかと言うと最近、私の昵懶にしていた後輩なのだが、自分の夢のために退職していった（約10年も勤務したのだが）からである。

もし、山やに同じことを聞いたら“○○ルート開拓とか、○○○初登頂とか、海外遠征”になるのだろうか？。夢はさまざまである。各人各自自分の夢？というものを持っていると思う。だからこそ毎日、その夢のために生きていっているはずである（だと自分は思っているが）…………。

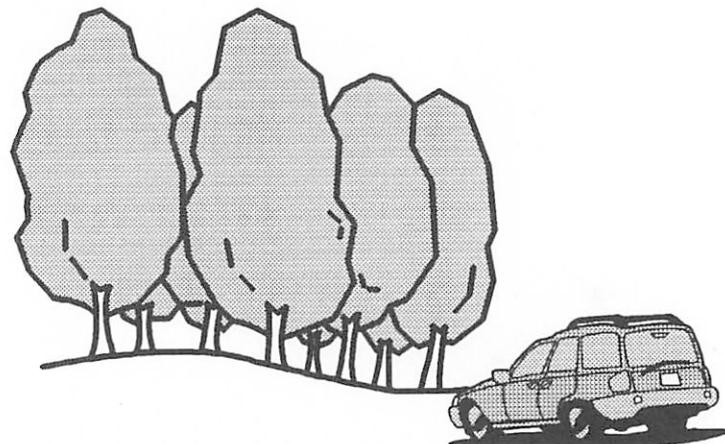
たとえそれが現実にするのは不可能な夢であっても、その夢に少し近づきたいと思う気持ち、いや持っているだけでも生き方が違ってくるのだろうと私は思っている。

世の中には、自分には夢が無いという人がいるがそれは嘘だと思う。本当は夢を持っているのだが自分を誤魔化しているのか、現実のプレッシャー、挫折等で夢をあきらめてしまった人だろうと思う。そんな現実であってもそれでも夢を持ち続けている人は、やはり輝いていると私は最近つよく感じている。

“いつまでも自分の夢を大切に”『あなたは、夢を持ち続けていますか？』……………。

6月4日の総会にて会則の一部変更がありましたので掲載いたします。

(編集長)



季報[R&V]第24号 発行1997年冬

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-05 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男

編集者：生井一男

印刷所：やまと印刷



岩壁、沢、冬山のクライミング集団